

幼児教育の方法に關する 重なる理法とは如何なる ものなるか

和田實

左の一篇は今回の夏期講習會に於て記者の講演したる幼児教育學中の一節なり。會員某氏の希望もだしがたく急劇摘録して之を筆曆版に寫して講習員諸君に頒たんと欲ししが折能くも本誌に餘白ありしを以て之に掲げて一般會員並に讀者諸君の御批評を仰ぐことゝはな

しつ。
幼児の教育法として矢張り一般の教育中に含まるべき筈であるからには其根本に横はれる原理原則と云ふものは兩者の間に何等の差異の有らう筈がない。若し幼児教育の根本原則が果して一般の教育の原則と相容れないものであるとか、或は一般教育の原則は以て幼児教育を律することの出来ないものであるとするならば二つの教育事業は正に各

八

殊別なる原理法則の本に各別個の教育學を構成せねばならぬ。一個の教育事業が二つの異なる學理を有するとは如何にしても許されがたき次第ではあるまいか。蓋し幼児教育とて其原理原則としては矢張り一般の教育と何等の差違ある可き筈でもないのである。然らば一般教育の根本原則とは如何なるものであるかと云ふに一言にして云はば、「自然主義」即ちこれである。換言すれば被教育者の發達性能に應じて之に適合せる教育を施さんとするのが現在に於ける教育事業の理想である。此自然主義なる教育法は其由來する處實に獨のメニユースに始まれるものである。今氏の言に因つて之を徵するに

「技術は自然を模倣するに過ぎない。小年教育者は醫師と同じく唯自然に従ふ可きもので己れ其其たるにわらず」と云つて居る。又佛のルツソーは次の様に云つて居る。
「兒童の性質を研究し之に適合せる教授を施す可し」次にフレイベルの師たりしベスタロツチ氏も之と同様なる意味の言説をなして居る。

「教育の目的を達するには自然殊に人間精神の自然性が指示する方進を採る可し」と云つて居る。最後に幼児教育の開祖たるフレーベルは如何なる原則の上に幼児教育の理想を組み立てたかと云ふに曰く

「子供の心には發達す可き人道の萌芽を有して居るので之を導き、之を保護して行つて一方には其不健全なる影響を與ふる誘惑より之を防いで以て本質を發達せしむ可きである。」

又曰く

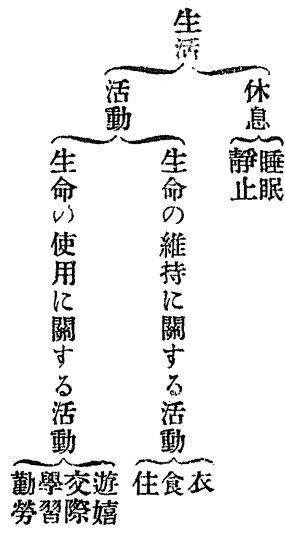
「諸君は敢えて我兒の本性に違へる目的を幼年時代に強いて斯くて普通の調和の發達を望むのは亦甚だ無理な次第ではないか」と云つて居る。言葉こそ一様ではないが教育史上に其名聲赫々たる以上の諸大家は斯くの如く皆一齊に教育の自然主義なる可きを主張して居る。今是等諸家の所説を前提として之を一個の理法に歸納して見るに明に左の如き結論を生ずる。即ち

「教育は被教育者の生活状態を支配することに因りて其目的を達す可きものである。」

是は當に吾人教育者の活動の據つて起る根本原則である。吾人は此原理を前提として凡ての教育的活動を演繹せなければならぬ。凡ての方法と云ふものは此規則から割出して行かなければならぬ筈である。

倍て斯の如くして吾人の仕事の根本法則は定まつたとしたらば次には如何にして被教育者の生活を支配す可きかと云ふことを討究するのは當然の順序であらう。而して如何に被教育者の生活状態を支配す可きかと云ふことは先づ被教育者の生活を調査し其性質を明かにする上に其方法は自然に見出さる可きものである。斯くして始めてフレーベル以上諸大家の改革思想にも適する譯であつて證する處自然主義の自然主義たる所以である。然らば幼児の生活状態は如何に、余は次に之を説明して見様、元來人間の生活と云ふものは之を大別するときは靜的には休息となり動的には活動と云ふものとなるのである。而して此活動は更に大別して生命の維持に關する活動と生命の使用に關する活動の二つとすることが出来る。生命の使用に關

する活動は又更に細分して遊嬉的活動、交際的活動、學習的活動、勤勞的活動の四とす可きである。以上は人間の生活の全体を分類しての話であつて之を圖示すれば左表の如くなる。



大人である所の人間の生活の全部は實に右表の如くであるが幼兒の生活状態は全然此表の示す所に一致しては居らぬ。是は幼兒の幼兒たる所以であつて誠に止むを得ざる所である。然らば幼兒の生活状態は此表に對して如何なる相違があるかを仔細に見て行つた結果、幼兒の生活状態は實に左表の通りであつて是れ以外大人の有するが如き複雑なるものを有して居らぬ様に感ぜられる。

幼兒の生活

- 一、休息
- 二、衣食に關する習慣的行動
- 三、遊嬉
- 四、交際上に於ける習慣的行動

人或は幼兒にも純粹に學習、及勤勞の二作用あることを稱するものがあるけれど是は大なる兒童を観察した結果か然らざれば是等の基礎たる萌芽的行動が遊嬉中に於て可なり大なる發達を爲したる有様を看守して斷定せる認見であつて決して正當なるものではないのである。一、子供、遊嬉と云ふものは人生に於けるあらゆる活動の縮寫圖であると云ふことは遊嬉の研究家又は兒童學者等の一 generally 唱ふる所で吾人の疑を容れぬ所である。既に人生の縮寫圖である以上は其中には交際的活動もあらずし學習的活動も乃至は勤勞的活動もあらうと云ふものではが決して直ちに純粹なる意味に於て又嚴格なる意味に於て、學習とか勤勞とか稱せらるるものではないのである。然るに一部分に於ける幼兒教育者は動もすれば此遊嬉的なる交際的學習的勤勞的活動を見て以て直に之を純粹なる意

味のものと見て居る。従つて其教育の方法には種々な誤點謬見の散見せられるのは誠に慨はしい次第である。餘談は借て置いて更に吾人は前表の四項に就いて考察するに其一、二、及四の三項は一括して習慣的行動と稱することが出来る。故に幼兒の生活状態は約して習慣的行動と遊嬉的行動の二項と見ることが出来る。

是に於てか幼兒教育の事項は當然「習慣」と「遊嬉」との二つであると云はなければならぬ。實際幼兒の習慣的行動を整理し其遊戯を完全ならしむることとに於て幼兒教育の目的を遂げんとしたことはフレーベルの教育思想であつたに相違ない。氏の著「人間の教育」中に論じて居る所を見ても此邊の思想を窺ふことが出来る。

併し從來の幼稚園に於て課して居る所の保育事項と云ふものは遊嬉の外に談話唱歌及手技の三つを置いて居る。是は吾人の便宜の爲めの並置ならば差支はないが若し唱歌や談話や手技の如きものを彼小學校等に於て課する純粹な教科の様に考へる人があるならば吾人は大に排斥せざるを得ない。

吾人は遊嬉ならざる唱歌、遊嬉ならざる童話や手技があらうと云ふことは之を認めない。幼兒の遊嬉の中に作業的のことがあり文學的のことがあり若しくは音楽的のことがあつたにしても夫れが直に大人の意味に於ける如く純粹なものではないのである。幼兒の遊嬉は人間全体の模型であるとフレーベルの云はれた通りで遊嬉は人類の活動の凡ての萌芽を所有しては居るが其は單に萌芽に過ぎない。決して出来上つた形に於てのものではないのである。故に幼兒教育に利用される凡ての事項は悉く遊嬉の冠の中にある可きもので遊嬉の意味を離れると同時に幼兒教育の事項としては相應しからぬものとなるのである。何故と云ふに幼兒の發達は其自發活動の築成する所であるとはフレーベルの云つて居る主義である然るに其自發活動なるものは吾人の所謂遊嬉と稱する所のものであるからである。

人或は遊嬉の教育的價値を疑つて一個の遊嬉が斯く大なる教育的價値を持つであらうか不安心に思ふ人がないでもないが是は實に杞憂に過ぎない。

實際子供は遊嬉すればする程益能く發達するものである。伊太利のコロッツアと云ふ人は遊嬉に就いて頗る研究した人であるが此人は遊嬉の教育的價値に就いて左の如く云ふて居る

遊嬉に於て必要とせらるゝ或行動の反復は此行動を固定し且容く殆んど習慣的に之を爲す様にする爲めに有要である。而して此固定、輕易、習慣は畢竟力に關して收得することを得得であり増殖である。

管にコロッツアのみならず幼児教育に遊嬉の價値あることは既に三千年の昔希臘のプラトーンに因つて鼓吹されたものである。氏は遊嬉に關して次の様に云つて居る。

三才より六才迄の時期に於ては兒童の意味に於ける遊嬉を許さなければならぬ。換言すれば此時分の遊嬉と云ふものは其年頃の子供の自然に傾く所で彼等同年輩位のもものが一所に集合したときには自ら見出される様なものでなければならぬ。

吾人は遊嬉で以て兒童の傾向を其業務に有益ならぬ。

方向に導くことが出来る。

一定の遊嬉を變更することなく繼續させたならば夫れは以て品性陶冶の手段とすることが出来る。

近くは我幼児教育の開祖たるフレーベルも其著人間の教育に於て幼児が遊嬉に因つて發達することを細論して居る。故にスペンサーが云つた通り教育に於ける成功は只人心が成熟に向つて進み行く自由の發達を助けて行くにあるとしたならば幼児の教育は幼児の遊嬉と習慣とを指導することに因つて其目的は達せらるゝに相違ないのである。是に至つて難者或は云ふ人がある。幼児教育が斯の如く遊嬉と習慣との指導に因つて爲し得るものならば幼児教育者は詰る所一個の子守女に過ぎないではないかと一應尤もな不審ではあるが併し是は一を知つて二を知らぬものである。成る程子守女は幼児の行動を看護する。又其遊嬉は或程度迄は指導する。併大体に於て子守のする處は主として消極的の注意に過ぎない、子供を危険に接せしめず害惡に接せしめないといふ云ふのが主たる目的で決し

て積極的に幼児の遊嬉を案配し之を或方向に導かうなど云ふ様なことは到底出来ないものである。然るに幼児教育者は幼児をして如何に完全に遊はしむ可きか其習慣は如何様に養ふ可きかと云ふことに就いて常に積極的考案を立て常に其腦裏には被教育者の將來に就いて明瞭なる意識を有するものである。斯る積極的の用意が所謂子守女なれるものに出來様か、是れ即ち幼児教育者が専門の教育家として充分の地步を占め得る所以である。若し夫れ幼児の教育が或人の云はるゝが如く單に之を保護するに過ぎないものならば即ち止む。苟も教育の目的に向つて之を誘導する必要があるならば積極的に之が豫案を要し組織せられたる豫定の見解を持つることの必要なるは明かなる事ではあるまいか。而して斯の如く組織したる豫案を立てることは子守などの到底企及し得る所ではないのである。

以上述ぶる所に因つて幼児教育が遊嬉と習慣とを指導する上に存することは略明かになつたらうと思ふ。然らば幼児の遊嬉は如何に之を導く可きか

習慣は如何に之を養ふ可きかと云ふことは次に來る可き問題である。之に關して吾人は先づ如何なる理想を持つ可きかと云ふに元來幼児に養ふ可き習慣は不知不識の間の移行を意味して居るのであるから其間に壓制とか抑壓とか苦痛とか云ふ様なものを含まないのが當然である。而して幼児の遊嬉は其性質上當然愉快なもの悦ばしきものであるから、併せて幼児教育の理想とするところは彼等が其天真を發露して嬉々として遊樂し忻々として嬉戲せる間に暖春の日光が万木を伸暢せしむるが如くに平和と快活との中に漸次目ざす所に誘導して教育の目的を遂げんとするものである。換言すれば幼児教育者は穩かに子供を養ひ充分に遊ぶ所をらしめて其間に導く所をあらんとするものであるから、之を幼児の側から見るときは善良な習慣に因りて行動し最も善く遊戯する處の子供たらしめんとするものである。

